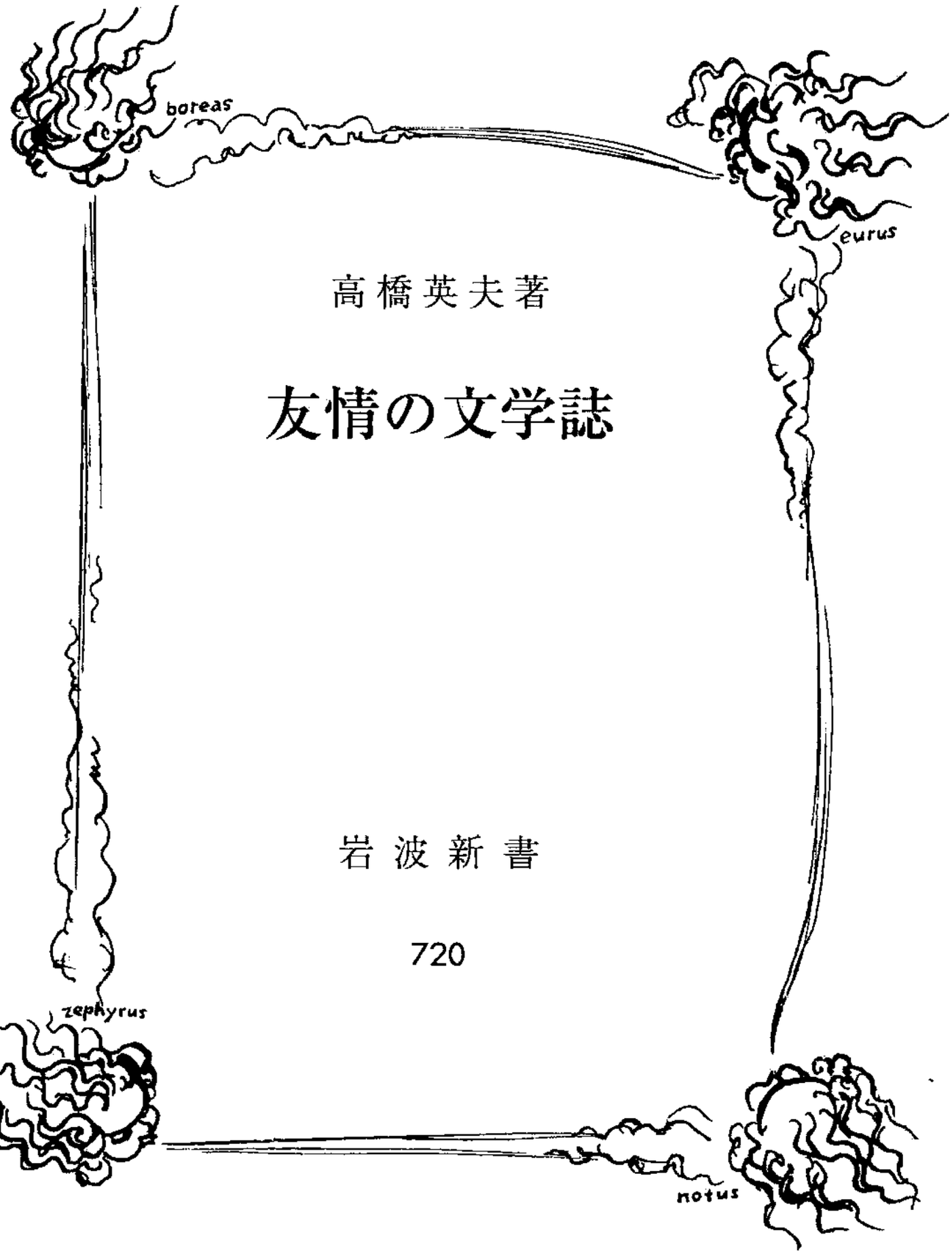
高橋英夫著

友情の文学誌

岩波新書

720



高橋英夫著

友情の文学誌

岩波新書

720

高橋英夫

1930年東京に生まれる
1953年東京大学独文科卒業
文芸評論家
著書—『西行』(岩波新書)
『偉大なる暗闇』(新潮社→講談社文芸文庫)
『ミクロコスモス 松尾芭蕉に向って』(講談社→講談社学術文庫)
『疾走するモーツァルト』(新潮社→講談社学術文庫)
『ブルーノ・タウト』(新潮社→講談社学術文庫)
『志賀直哉 近代と神話』(文藝春秋)
『濃密な夜』(小沢書店)
『小林秀雄 声と精神』(小沢書店)
『花から花へ 引用の神話 引用の現在』(新潮社)
『ドイツを読む愉しみ』(講談社)
訳書—ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』(中公文庫)
ケレーニイ『神話と古代宗教』(ちくま学芸文庫)

友情の文学誌　　岩波新書(新赤版)720

2001年3月19日　第1刷発行

著　者　高橋英夫(たかはしひでお)

発行者　大塚信一

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・三陽社　カバー・半七印刷　製本・中永製本

© Hideo Takahashi 2001
ISBN 4-00-430721-1　　Printed in Japan

目次

【プロローグ】
友情の遠近法
―漢詩の世界―　1

漱石と子規　15

鷗外と若き友
―年齢差が生みだした友情―　44

鷗外と賀古鶴所　59

【第一のインテルメッツォ】
青春の友から円熟の友へ
—精神史的に—　84

芥川龍之介とその周辺　105

「師弟」と「友情」の織物
—耽溺と確執—　131

作品の中の友情
—漱石・鷗外ふたたび—　148

白樺派の人々　160

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

【第二のインテルメッツォ】
さまざまな友人たち　184
小林秀雄の世代　196
【フィナーレ】
白洲正子、そして吉田健一　207
あとがき　223

【プロローグ】

友情の遠近法

――漢詩の世界――

世界の文学史をふりかえって見たとき、そのあらわれはさまざまだが、「友」「朋友」が方々に、くりかえし登場していたのにふと気がつくことがある。そういうとき、私の心の中の反応はおおよその所、二種類ぐらいになるだろう。

その一つは、いくらか単純な感想で、「おや、こんな所にも友達がいたのか」とか、「そうか、これは酒の歌だと思っていたが、友人と酒を酌みかわしている。本当の眼目は友人の方らしいぞ」とかいうものだ。

もう一つは、やや屈折していて、「現代の文学作品には、どうも友人があまり出てこない。どうしてなんだろう」というふうになる。もう少し追いかけてゆくと、この感想は「友人が出てこないのは、友人が描けないからではないか」といった想像が加わって、色合いが変ってゆく。

「今日の人々は友人をもたなくなったのだろうか。まさか、そんな筈はないが。でも、ひょっとすると……。いやそこまでは言うまい。たぶん、誰にでも昔と同じように、友人はいることはいるのだが、現代文学は現代文学理論の圧力のせいか、文学特有の表現や技法の面からか、それとも結局は時の流れというべきか、友人、友情というモチーフとそりが合わなくなってしまったのではないか」――こんな想念のかたちを描く。

ここで、友情を一種の精神活動と見てゆくと、人間の精神活動は外部世界と内部意識の出会いで成立するともいえるが、意識には意識の経済学がはたらくのが通例で、そこが意識の特性になっている。すべてを意識し続けることはできないから、重要と見られるものにしか意識は向わず、それ以外は意識からはずれ、忘れられる。それは存在しなくなる。

この事情があって、今日の文学意識には友人や友情が存在しなくなった、とも考えられよう。ただ、日々のくらしの中であまりにも馴染んでいるものならば、それでもいい。たとえば空気、水、三度の食事。最も必要なものを、かえって意識しないのが人間である。同じような意味で平穏で順調な日々の中にいると、くらしを共にしている家族や身近な人たちにあまり意識をふりむけないで済む。これも意識の経済学である。

だから何かの理由でそうは行かなくなると、空気や水の大切さが身にしみて、「これがいのちの根元なんだ」とあらためて思うようになる。友人がまさにその典型で、意識の経済学なん

かがさっぱり役に立たないことが明らかになると、とたんに友人がいきいきと意識によみがえってくる。たぶんそうした事情と関連してだろう、文学の中に友人があらわれる状況はさまざまではあっても、ある程度までは、決まった形や傾向を見せてもいるようだ。何らかの理由で友人が去って行き、いなくなったとか、友人同士の仲に亀裂が入って愕然とするとかしたとき、意識の尖端部に友人というものが痛く感じられることが多い。

つまり別れ、別離である。友情なるものは別れの味つけがきいたときに、色濃く浮びあがって、人の眼に灼きつくことが多いといえよう。といってもそれは、主として文学という言葉の舞台でのことだから、次のように言い直せるかもしれない――「友人」と「別れ」と「文学」、この三者のかかわりはどこがどうなっているのか、どうしてそうなったのか、説明しようとしてもなぜかあまりはっきりしない、不思議な含みをもった三角関係を形づくっている、と。「含みをもった」というのは、現実の男女の三角関係とはちがって、「文学」の世界における三角関係なのだから、どんな結末になっても何か味わいが出てくるのがいい、というようなことである。つまり「友人」と「別れ」だけで「文学」がないと、なまなましくなってしまうだろうし、「友人」と「文学」だけで「別れ」の成分がないような場合も同様にいえよう。

中国、唐時代の詩にそのような意味で友をうたい、友情をうたったものがずいぶんある。詩賦の盛んであった中国のこと、はるか周の時代から友情の詩はあったが、目立ってそれが盛ん

だったのは唐詩だった。たとえば王維の七言絶句、有名な『元二の安西に使いするを送る』

渭城の朝雨　軽塵を浥す
客舎青青　柳色新たなり
君に勧む　更に尽くせ一杯の酒
西のかた陽関を出づれば　故人無からん

これは首都長安から西に二千キロ、使者として旅することとなった友の元二を渭城まで送ってゆき、一泊した翌朝「さあ、もう一杯飲み干したまえ」と元二に酒を勧めているのだ。「陽関を西へ越えれば、もはや故人(知人)もいないのだからね」と。王維は李白、杜甫とならんで盛唐期の代表的な詩人。一方では画人でもあり、南画の祖として位置づけられてもいる。

この詩は「渭城曲」とも呼ばれ、友情をうたった多くの詩のなかでもとくに人口に膾炙したもの、その情景は眼に浮かぶようである。一言、断っておくと、私は酒を飲まない人間なのだが、文学の中のこうした味わいは分かるし、詩を楽しみながら作者や作中の登場者たちに感情移入できるのである。そこが面白い。これは、友情なるものが個人的条件や偏執を超えたもの

であることの一つの証しになるだろう。友情は普遍性と意外性の両面をもつのである。世界観や人生観が異っていても、日常の習慣や衣食住の好みが異っていても、友情が成り立つことはありうるのだ。もちろん、それらが一致したことで友人関係が確立されるという場合なら、数えきれないほどだろう。このように友情は規定しがたいところがあり、せいぜい普遍性と意外性をもつということしかできない。

もう一度、王維の詩に戻ろう。これが興味深いのは、これは酒の詩であり別れの詩でありながら、同時に友情の詩であるということだ。そして中国詩の評釈や鑑賞の本では、こういう作品がたいてい友情の詩という分類の中に入っていることだ。つまり中国の詩では、友情の詩というのが一つの大きなジャンルとして確立されているのである。

今度は、王昌齢の『芙蓉楼にて辛漸を送る』という詩だ。

寒雨　江に連なって　夜　呉に入る
平明　客を送れば　楚山　孤なり
洛陽の親友　如し相問わば
一片の氷心　玉壺に在り

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

これは南京で役人をしていた作者王昌齢が、南京から洛陽に帰る友人辛漸に贈った送別詩である。冬の寒い雨が長江に降りそそぐなか、夜、二人は呉の国に入った。芙蓉楼で一泊し、翌日の明け方(平明)、王昌齢は去ってゆく友を見送ったのだったが、その行く手には楚山がぽつんと一つ離れて見えていた――そんな楚山の孤独な感じが作者の心情にも通じたのだ。

作者王昌齢は不遇な地方官生活をつづけ、「辺塞」詩や「閨怨」詩で知られたが、最期は人に殺されて終った人物だ。この詩のすばらしさは後半にある。「きみが洛陽に帰ったとき、もし洛陽の親友が、南京の王昌齢はどうしている?と訊ねてくれたら、一片の氷が玉の壺の中にあるように、心は清冽だよ、と答えてくれないか」――

「一片の氷心　玉壺に在り」――「これはすごい」と唸らされる名句だが、人生の不遇に堪えている悲しみがこの名句を結晶させたにちがいない。しかしここで注意したいのは、本来この句は、先行する六朝時代に使用例があったということである。六朝宋の詩人鮑照(ほうしょう)の『代白頭吟』に「清きこと玉壺の冰(こおり)の如し」という表現がすでにあった。だから王昌齢のこの一行はそれを(日本式にいえば)本歌取りしたもの、あるいは「引用」したものにほかならない。だからこそ、なまな心情が表現を洗練させ、表現がふたたび心情を純化させてこのすばらしさが輝き出たのだ。

この問題に関連して、別れてゆく友の名が分っている詩と、固有名詞(友の名)がなく、一般

的な意味での別れの歌という二種類があったことにも眼を向けよう。これは、友の名なしでも名作があることに意義深さをおぼえるからである。そういう詩として、李白の『友人を送る』、王維の『送別』などが知られている。次に李白の『友人を送る』を挙げよう。

青山　北郭に横たわり
白水　東城を遶る
此の地　一たび別れを為し
孤蓬　万里に征く
浮雲　遊子の意
落日　故人の情
手を揮って　茲より去れば
蕭蕭として斑馬鳴く

意味は分りやすい。「北郭」は城郭の北、「白水」はすんだ川の流れ。「孤蓬」はたった一本のよもぎだが、これは秋には枯れて風のまにまに流れてゆくので、漂泊(者)のたとえになっている。「斑馬」はためらって前へ進まない馬。これら友の名のない別離の詩も、すでに「友情」

なり「別離」なりが表現ジャンルとして、もしくは詩的定型として成立していたことを物語っている。

こう見てくると、「友人」や「友情」のありようについて、いくつかの洞察が得られる。およそ人間のいる所、必ず友情が生まれるという考えも成り立つ。それは貴賤貧富を問わない。老若男女にかかわらない。その点で友情には無条件性、普遍性があるのは確かだが、文学史上の友情はそれとはやや違う別の側面を示してきた。人間についていえば、志や夢や理想を求めている人物に「友情」が見えてくるのだ。シチュエーションでは、別離や失意が蔽いかぶさってくる中で、パセティックで内面的な輝きを放つ「友情」が見えてくるのだ。この傾向が文学史を通じて顕著だったことは否めない。もちろんそうではない場合もあり、だから文学は豊かさを失わなかったのである。

ところで、私はしばらく前から「改めて、友情って何だろう？」と考えてきた。仕事の切れ目に「十分間だけ」とか、「いま二時半か、三時から用事だが、じゃあそれまで」という具合に、友情に意識を向けてきた。これが私の流儀で、そうやって機運が熟するのを待っている。はじめから一日中そればかり考えたりはしない。

友情論は私には最初ではない。一九八四年に「友情」を基礎低音ないし地下水脈とする『偉大なる暗闇』という長篇書き下しを、私は刊行している。旧制一高のドイツ語と哲学の教師だった岩元禎（いわもとてい）が主人公だった。旧制高校は制度的には、帝国大学の予科に近い性格をもち、エリート養成のために外国語と教養主義を最重要視していた学校だったが、人間的にみた場合、全寮制に基づく学生の自治・自由に特色があった。そこから発して学園全体が独特の友情空間を形づくり、友情という横糸に対する縦糸として、師弟関係の高まりも顕著といえた。私は各地に次々と成立したそういう学園のモデルという意味で旧制一高を取りあげ、教師岩元禎、学生九鬼周造、和辻哲郎……といった多くの人物を『偉大なる暗闇』で語ったのだった。

ところで岩元禎は夏目漱石と同世代である上に、一高教授として漱石と同僚でもあったが、漱石の『三四郎』に出てくる広田先生のモデルと思われていた人物である。岩元禎が本当にモデルだったのかどうかは、漱石研究の一題目だが、要は明治のころ方々の学校に、学生生徒に対して強烈な磁力を発揮した名物教授が出現し、学園の中に人間的・知的なある気流が湧きあがるといった時代的共通性が見出されることが重要なのだ。それを認めればいいのだ。湧きあがったのが時代の新風としての「師弟」そして「友情」だった。私はそのことを書いた。

それから十五年あまり、また「友情」と向き合ってみると、「友情にもさまざまある」というのが最初の感想だった。「友情」には多様性があるのだ。すこし莫迦げているが、「友情の数

は人間の数より多いのではないか」と、ふと思ったりした。人生観でも世界観でも、人間の数だけいろんなものの考え方が存在する、といわれる。では、人間の数だけ友人というものは存在する、となるのだろうか。友人の数は人間の数より何倍も多いのではないか。誰でも二、四人とか十二、三人とか友人がいるからだ。ただ、友人の数が多いのも意味はあるが、それだけでは実はどうにもならないのは、誰しもが知っている。

そんなことを思うともなく思っているうち、私は別の多様性に気がついた。いかにも友人がいそうな場所に必ずしも友人はいないといったことが、よく起っているのではないか。反対に、友人などいそうにない所にかえって本当の友人がいて驚かされる、そんな不思議な様相が見えてきた。別れに際して「友情」の詩が色濃くあらわれることを王維や王昌齢を例に挙げて語ったが、これも「友情」の多様性だろう。

別れを言い直せば、距離やへだたりである。距離やへだたりが介入すると「友情」は強化されるらしい。近さ、密接とはちがう何かが「友情」の媒剤なのだ。普通、友人は近しい存在と漠然と思われていて、「莫逆の友」といった場合には、近さどころか一心同体みたいな関係が成立している印象さえ受ける。近さ、親密さ、同一性、それも貴重にちがいない。しかし距離とか異質性も「友情」を生むのだ。実は、この方が人の心に刻まれるのではないか。これを多様性と呼ばなくて何だろう。

そうした距離、へだたりの「友情」の古典的な一例をあげてみよう。唐の二大詩人、李白と杜甫のあいだの「友情」である。古来彼らは「李杜」と称され、「詩仙」李白、「詩聖」杜甫といった形容を冠せられてたたえられてきたが、二人のへだたりと差異は決して小さくはなかった。にもかかわらず二人は詩において友であり、お互いを思う詩を作っている。

李白には『沙邱城下より杜甫に寄す』という詩がある。李白四十四歳、杜甫三十三歳のとき、二人は洛陽で出会った。李白は奔放な言動で長安の宮廷から逐われたところであり、杜甫はこれから長安に行って仕官しようとしていた。その点で二人の人生はちょうど逆向きになっていたし、年齢差も十一と大きかった。出自も性格気質も対蹠的である。でも二人は意気投合した。もう一人の詩人高適を加えて、彼らは河南・山東の地でしばらく友情の日々をすごした。そして一旦別れたあと、翌年杜甫は、魯郡の沙邱にある女の家で病を養っていた李白を訪れて再会をはたした。二人の直接の出会はそれが最後で、以後二人は会っていない。

我来る竟に何事ぞ
高臥す沙邱城
城辺　古樹あり
日夕　秋声を連ぬ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com